



切り絵：比企善彦作



炭木神社社報

発行所

炭木神社社務所

炭木市元町4-3

072 (622) 2346

[http://www.](http://www.ibarakijinja.or.jp/)

[ibarakijinja.or.jp/](http://www.ibarakijinja.or.jp/)

新穀感謝

古来より我が国は「豊葦原の瑞穂国」と称し、稲が豊かに稔ることを祈り続けてきました。そして稲はニギノ命様が天上の神々の国である高天原からこの地上に天降る時に天照大御神様から稲穂を授けられたと信仰的に神話として語り継いできました。

私達の祖先は稲作を単なる農耕として理解していたのではなく神聖なひとつの営みとしていたのです。春には秋の豊穰を祈る祈年祭（としごいのまつり）に始まり、御田植祭、秋には稲穂を刈り取る抜穂祭、そして収穫への感謝を捧げる新嘗祭（いなめさい）が齎行され、常に神様への祈り・感謝が捧げられてきたのでした。祈年祭の「とし」とは本来、稲を指す言葉であり、一度の稲作が一年かかることから期間の単位となり「年」や「歳」の文字を用いるようになったことから稲に対する思いが感じられます。

当社でも戦前には神饌田（現在の中央公園テニスコート付近）があり、古式の随に春には御田植祭、秋には抜穂祭を地域住民を挙げて盛大に齎行し、神々へ感謝の心を捧げてまいりました。

昨年、神宮より稲穂「イセヒカリ」を賜り、ささやかですが儀式殿庭で栽培し、去る、十月二十六日に二回目となる抜穂祭を齎行しました。そして収穫した稲を御神前にお供えし、十一月二十三日に新嘗祭を齎行しました。あらゆるものが大量生産され、また勿体なくも大量に浪費される時代。このような時代にこそ、今一度神の恵みを感じたいものです。

たなつもの 百の木草も天照らす

日の大神の恵み得てこそ

(本居宣長)

この歌からも、先人達の神への感謝の心が伝わってきます。



戦前の抜穂祭

シリーズ神道 ③2

三種の神器

〜八咫鏡〜

「三種の神器」は、皇位の御璽としての御神宝である八咫鏡・八咫瓊勾玉・天叢雲劍(草薙劍)のことを言います。

日本の高度成長期において、その身近な豊かさの証としてテレビ・冷蔵庫・洗濯機を御神宝に做つてその時代の「三種の神器」とも呼ばれたこともありました。

八咫鏡は、「古事記」「日本



書紀」によれば、皇祖の天照大御神様の天石屋戸にお隠れになられた際に思金命が伊弉許理度売命に命じて造らしめたもので、

天照大御神様が岩戸を細めに開けた時、この鏡に映つた天照大御神様ご自身の御姿に興味をお持ちになり、やや岩戸に近づかれた時、天手力男命がその御手を取りて外に引き出され、そして再び世は明るくなつたと記されています。

瓊瓊杵尊様が天上の高天原から地上に天降られる時、天照大御神様はこの鏡を我が御魂として祀るようにと仰せになられ授けられました。

その後この御鏡は、代々宮中で天皇様ご自身がお祀りされておられました。第十代 崇神天皇の御代に大神様のご神威を恐れ畏んで皇居の外、大和の笠縫邑にお祀りすることになり、宮中には新たに大神様を招いた形代を奉斎しました。笠縫邑では、天皇様に代わり皇女 豊鍬入姫命が天照大御神様をお祀りされていましたが、垂仁天皇の御代に至つて、皇女 倭姫命が新たに天照大御神様をお祀り申

し上げるにふさわしい地を求められることになりました。倭姫命は大和の国を始め伊賀、近江、美濃の諸国を巡られましたのち、伊勢の国の度会(わたらい)の地、宇治の五十鈴川の川上に到られ、天照大御神様のお教えのままに「祠」を建ててお祀り申し上げることになりました。

献詠 火串会

(平成二十二年新年の句)

日の丸に雅楽流るる初句会 倉垣刀美子

初詣どれも外せぬ願ひごと 岡田 晴江

生駒嶺の影を起こして初茜 小野 晶子

神苑の臘梅灰と香を放ち 河辺さち子

この晴れに一門揃ひ寒稽古 北川 一志

御降や賑はふ宮居すぐに晴れ 倉垣 政一

可も不可もなくめでたし年迎ふ 菅原 澄江

歌留多とる座にせんざいの運ばれし 高橋 千雁

このお祠が現在の伊勢の神宮の内宮です。

戦後、神宮はやむを得ぬ事情により一宗教法人となりましたが、このように本来ならば皇室の下にある特別なご存在であるが故に、神社界では「本宗」と仰いでいるのです。



二十一年一歩踏み出す宮の春 田中美佐子

えとの虎くぐる神事や春を待つ 谷本 房子

句の縁宮につなぎて初句会 林 曜子

初日の出背筋伸ばして拝みけり 武藤千代子

初神楽巫女の衿足透きとほる 森脇甲子朗

ひとときの至福に浸る初湯かな 八木 徹

年を合はす淀の三川初明り 山田 国夫

新春の参集殿の古色かな 山本 尚一

神さまのおはなし ⑬

海幸山幸

その二

さて、火遠理命は、この国に
来た目的を思い出して、大きな
ため息をおつきになった。豊玉
毘売命は、そのため息を聞いて、
父に「火遠理命は、ここに三年
住んでおりますが、その間ため
息をつくことなどなかったのに、
昨夜は大きなため息をつかれま
した。何かわけがあるのではし
うか」とおっしゃいました。そ
れで、その父の綿津見大神が婿
に尋ねて「今朝、娘の話を聞い
たところ、三年暮らされてため
息などなされたことがないのに、
昨夜は大きなため息をつかれた
とか。何か事情があるのですか。
また、この国にどういう理由で
来られたのでしょうか」とおっ
しゃいました。

火遠理命は、兄の釣り針をな
くしたと、兄にそれを返せと
強く責められたことなど、つぶ
さに語られました。

そこで、海の神は、海にいる
大小の魚をすべて集め、「もしこ

の釣り針を取った魚はいるか」と尋ねると、諸々の魚が「この頃、赤鯛がのどに骨が刺さってものが食べられないと嘆いていました。だからこの釣り針は赤鯛が取ったでしょう」と申しました。そこで、赤鯛ののどを探ると、釣り針がありました。すぐに取り出して洗い清め、火遠理命に差し出した時に、綿津見大神が教えて「この釣り針を、兄にお返しになる時に『この釣り針は、ぼんやりの釣り針、猛り狂う釣り針、貧しい釣り針、役立たずの釣り針』と言って後ろ手に渡しなさい。そして、兄が高地に田を作ったら、あなたは低地に田をつくりなさい。そうしたら、私は水を支配しますから、三年の間、必ず、兄は収穫がなく貧しくなってしまうでしょう。もしそうしたことを恨んであなたに攻めてこられたら、塩盈珠を取り出して溺れさせなさい。もし兄が困って許しを乞えば塩乾珠を取り出して生かしなさい。このように苦しめなさい」と言って、塩盈珠・塩乾珠を授けられました。

そして、すぐにわに鮫を招集して「今、天津日高の御子、空

津高彦が、上つ国にお帰りになる。誰か何日でお送りできるか申してみよ」と尋ねられました。そこで、わに鮫たちはそれぞれ自分の身長に応じて日数を申す中で、一尋わに鮫が「私は、一日で送って、すぐに帰ってまいります」と申しました。そこで、その一尋わに「それでは、お前がお送りしなさい。海を渡っていく時に、恐ろしい思いをさせないようにしなさい」と仰せになり、すぐにそのわに鮫の背中に火遠理命を乗せ送りだしました。そうして、約束どおり、一日の内ににお送りしました。そのわに鮫が帰ろうとした時に、火遠理命は、身に付けておられた紐のついた小刀を、その首につけて返しました。それで、その一尋わには、今、佐比持神(佐比は刀の意)と言うのです。

こうして、火遠理命は海の神が教えたように、その釣り針を火照命に返されました。兄の火照命は、ますます貧しくなり、前にもまして荒々しい心をおこして攻めてこられました。その時火遠理命は、塩盈珠を取り出して溺れさせました。そして、火照命が苦しんで許しを乞えば、

塩乾珠を取り出して助けました。このように悩ませ苦しめたところ、火照命はぬかずいて、「私は、今から後、あなたを昼夜守護する者として、お仕えます」と仰いました。火照命は、隼人族の祖先で、それで隼人の人たちは、天皇の宮殿を警護する役目を担い溺れた時のいろいろな仕事を絶えることなく伝え、お仕え申し上げているのです。

就任報告

恵美須講々元の安達太一郎様が昨年四月にご逝去され、その後任として恵美須講参与、監査で総代の木内孝至様がご就任されました。

帰幽報告

永年総代として、神社護持のため何かとご尽力を賜りました金原藤雄様が平成二十二年八月にご逝去されました。

金原様は総代ご就任以来、奉賛会副会長をはじめとしてひとかたならずご尽力を賜りました。

ここに永年にわたるご功績に衷心より深謝し御霊の御平安をお祈り申し上げます。

茨木神社の文化財

燈籠

神社の境内には、石燈籠、朱塗りの燈籠、木製燈籠さらに社殿内の金属製吊燈籠等を合わせると百基近くの燈籠があります。

銘がなかったり、風化して読み取れないものもありますが、いずれもその時々の氏子・崇敬者の祈りと感謝を込めて奉納された燈籠です。

確認できる一番古い燈籠は、皇大神宮覆屋の中にある木製燈籠で墨書で「元禄初年（一六八八）建立」と書かれています。今から三百二十年以上前のものになります。

石燈籠の中で一番古いものは、東参道の鳥居のすぐ両脇にある石燈籠二基です。「寶暦五年（一七五五）乙亥九月」と銘があります。



安永六年（一七七七）には、

本殿御垣内の六基、本殿前階段左右にある燈籠の内二基、巖島神社の左右二基、計十基もの燈籠が奉納建立されています。その中には茨木柴屋町始め池田、大坂嶋之内（心斎橋あたり）等奉納者の銘が刻まれているものもあり、地元茨木以外からも奉納があったことが窺えます。前年の安永五年（一七七六）に、本殿の屋根の葺き替えが行われており、それを奉祝し奉納されたのではないかと思われます。

大正七年（一九一八）六月には、境内社の稲荷神社を崇敬する会として創立された茨木末廣講が、大正十三年（一九二四）に稲荷神社前の燈籠を始め鳥居、狛犬を奉納・整備されています。

また、同年には、境内南側の鳥居を入った左右の狛犬や巖島神社の鳥居も奉納建立されています。この年は昭和天皇様が御成婚された年であり、奉祝記念に奉納されたのかもしれない。

また参道に並ぶ朱塗りの燈籠五十基は昭和五十七年（一九八二）茨木神社恵美須講創立三周年記念事業として御奉納されたものです。

このように燈籠の多くが、氏子崇敬者の氏神様に対する篤い



畏敬の念により寄進されてきました。

これらの燈籠からご神前に灯明をともすことにより神さまのご加護をより一層強く祈る心が伝わってきます。

これからの主な神事

十二月三十一日

越年祭

一月一日 歳旦祭 午前十時

一月九日～十一日

十日戎祭

一月十五日

御火焚（とんど）

祈禱木奉焼祭

二月三日 節分祭・鎮魂星祭

二月十一日

紀元祭

二月一日 初午祭

四月八日 人形奉焼祭

四月十八日

春祭（祈年祭）

奉賛会

厄除安全祈願祭

休憩所・お手洗い新設工事

東門脇にあったお手洗いは、男女兼用のため、皆様にご不便をおかけしておりました。

この度、男女別のお手洗いと併設してご参拝の待ち合わせ等にお使いいただけるように休憩所を建設いたしましたしております。

一月末の完成を予定しておりますが、その間ご参拝の際にご迷惑をおかけいたします。工事現場付近を通行の折には十分ご注意ください。よろしくお願いいたします。